

■ピラミーデが考える遊びの重要性

●遊びによって現実を超える。

子どもは今ある現実しか見えず、明日や未来という時間の認識は希薄です。子どもにとって今ある現実がすべてであり、世界は自分の手の内にあると考えているので、自分の思い通りにならないときは泣いたりぐずついたり、反抗したりとわがままなふるまいをし、他者について考えることは困難です。



子どもたちに他者理解 <世界には自分以外に他者が存在すること、違った考え方があること、あなたの要求していることがすべてではないこと>をうながしていくために、「遊び」が重要な役割を果たします。

夢やファンタジーは遊びから生まれます。遊びによって、子どもは現実を超えていく力を得るのです。「子どもは遊びから学ぶ」という教育的な視点と、「遊べるから現実を超えていける」という心理的な視点が、ピラミーデが考える「遊び」の基礎になっています。

<衣装を変えるドレスアップのまま遊びを続けています。>

●ごっこ遊びの重要性。

これまでは、事実や知識を伝達することが教育でした。すなわち、現実を教えることが教育だったのです。しかし、子どもの不可解な事件が目立つようになり、学ぶ意欲を失った子どもが多くなったことを考えると、子どもが未来に向けて羽ばたいていくための力を育てるのが、いま必要な教育ではないでしょうか。



未来に向かう力とは、夢やアイデアやものを想像する力です。しかし、これは教えられるものではありません。遊ぶこと、中でも他者とかかわりながら遊ぶことでつちかわれていくものです。

とくに、ピラミーデは、子どもに想像力をつけることが保育者の仕事であると考えています。

<人形をモデルに使った言葉遊びの指導を行っています。>

■遊びを展開させる保育の実践例

●テーブルでパーティー遊びをしている場面。

遊びを豊かにするために、保育者にはある重要な役割があります。それは、遊びに新しい刺激を与えることです。

子どもの遊びの特徴は、同じ遊びをくり返すことです。子どもは安定を求める傾向にあり、これは子どもが落ちつくためにも大事なことです。しかし、くり返しが多くなると好奇心や探究心が育たず、発展性がありません。そこで保育者が新しいアイデアを入れて刺激を与えます。

例えば、子どものパーティーごっこの遊び場面で、保育者が急にお客になって「こんにちは。今日はごちそうしてくれますか。」と話しかけます。あるいは、食べている最中に「お腹が痛いわ。救急車を呼んでください。」と病人になります。このように、保育者が急に役割を変えたり、場面を変えたりすることで、遊びが発展し豊かになります。



●遊びの見本を見せる。

幼い子どもが自主的に遊びを展開しそうにない時は、保育者は見本を見せながら遊びの支援をしています。こうしたごっこ遊びでは、子どもは遊びの最中に感情を入れますが、終われば感情を抜いてごっこ遊びの素材を単なる「物」として理解します。この病院ごっこでも、遊びが始まると子どもはぬいぐるみを生きた動物として見ますが、遊びが終わったとたん単なる“ぬいぐるみ”に戻ります。これが「認識」であり人間の知恵です。子どもは遊ぶことで想像を働かせ、もの（現実）を超えるのです。



〈病気の人形を世話する遊びの見本を見せている。〉